
大学日语泛读

第三册

林娟娟
编著

厦门大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

大学日语泛读/林娟娟编著. —厦门:厦门大学出版社, 2002. 1
ISBN 7-5615-1811-0

I. 大… II. 林… III. 日语-阅读教学-高等学校-教材
IV. H369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2001)第 071534 号

厦门大学出版社出版发行

(地址:厦门大学 邮编:361005)

<http://www.xmupress.com>

[xmup @ public. xm. fj. cn](mailto:xmup@public.xm.fj.cn)

福建沙县方圆印刷有限公司印刷

(地址:福建沙县城西后路 10 号 邮编:365500)

2002 年 1 月第 1 版 2002 年 1 月第 1 次印刷

开本:850×1168 1/32 印张:9.25

字数:232 千字 印数:1—2 000 册

定价:15.00 元

如有印装质量问题请与承印厂调换

前言

本书是《大学日语泛读》第三册,适用于大学日语专业二年级下学期或三年级上学期,同时也适用于具有同等语言程度的大专自考、电大、业大以及自学者培养和训练日语阅读理解能力。

本书根据《高等院校日语专业高年级阶段教学大纲》的要求编写,选用的文章题材广泛,体裁多样,突出其知识性和趣味性。在编写结构方面与前两册相同,共有十课,每课由一篇正文、二篇阅读原文组成。每课的结构是:课文、生词、解说、阅读、练习等项。各项之间互相照应,互有关联,主题鲜明。每课的教学时间可视学生的水平,课文长短和难易程度而定,一般约为八学时。

根据阅读课的教学特点,并征求了学习者和授课教师的意见,编者在第三册的编写时做了如下改变:解说部分不再解释句型和语法,代之以单词注释和短句解说。这主要是考虑到让学生运用从精读方面获得的知识和经验去独立阅读,灵活性比较大。

练习部分不再采用前两册的大部分练习形式,更多是以提问的形式启发、引导和考查学生对内容的理解。有的问题具有一定的深度和广度,可以促使学生深入思索,培养分析问题的能力、批评和论辩的能

力以及提出问题和解决问题的能力。学习者从语言的综合范例中学习语言,可以充实语言知识,提高阅读理解能力,扩大视野,增加积累,丰富文化底蕴。

本书的编写承蒙我校日语教师迎胜人先生、吉川雄幸先生的认真审阅,并得到日语专业高锬老师的热情帮助,以及本书审稿人刘晓民先生、责任编辑陈丽贞女士的大力支持,值此付梓之际,谨表诚挚谢意。

由于编者水平有限,书中错误和不妥之处在所难免,恳请同仁和广大读者批评指正。

林娟娟

二〇〇一年十二月

于厦门大学

目 录

第一課

本文

花を追う人々

単語リスト

解説

閲読

1. りんごの涙

2. 高原の秋を行く

手引きと練習

第二課

本文

情報時代

単語リスト

解説

閲読

1. 地球に定員はあるか

2. 少数意見

手引きと練習

第三課

本文

馬

単語リスト

解説

閲読

1. 鶴

2. 木とりとそのいもうと

手引きと練習

第四課

二九

二八

二二

九

一三

一八

七

五

一

三〇

三八

四四

四八

五四

五六

五九

六七

七三

本文

季節感……………七七

単語リスト……………八一

解説……………八二

閲読

1. 春の庭……………八四

2. 自然への回帰の旅……………八八

手引きと練習……………九四

第五課

本文

友人について……………一〇一

単語リスト……………一〇七

解説……………一〇九

閲読

1. 個性的に生きる……………一一一

2. 民主主義と倫理……………一一六

手引きと練習……………一二五

第六課

本文

ひんぱんに正しく子供を褒める……………一三〇

単語リスト……………一三九

解説……………一四一

閲読

1. 相手の立場を考える心を教える……………一四四

2. 商売心得帖……………一五六

手引きと練習……………一六四

第七課

本文

秋の雨……………一六八

単語リスト……………一七二

解説……………一七三

閲読

1. 蛇……………一七五

2. 紅梅 一八〇

手引きと練習 一八五

第八課

本文

新しい習慣をつくるには 一八八

単語リスト 一九三

解説 一九五

閲読

1. すべてのものは三層から成り立っている 一九八

..... 一九八

2. 見ることに 二〇五

手引きと練習 二一一

第九課

本文

日本の言葉と文化(一) 二一七

単語リスト 二二五

解説 二二五

閲読

1. 日本の言葉と文化(二)二三〇 二二五

2. あいづち 二三六

手引きと練習 二四一

第十課

本文

日本蜜蜂と西欧蜜蜂 二四六

単語リスト 二五五

解説 二五八

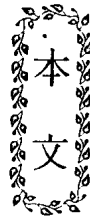
閲読

1. 日本のタテ社会の特徴 二六二

2. 日本人の社会的性格 二七一

手引きと練習 二七九

第一課



花を追う人々

北の国では雪がとけ始めて、「土が見えてきた」と、大よろこびをするころ、南の国の九州では、もう春の花が咲いています。まっ黄色の菜の花畑には、たくさんのミツバチがブンブンとび回って、蜜を集めています。

ツバキや、ウメが咲き始めると、ミツバチは巣の中で、春のために子どもをそだて始めます。

早春の畑に、菜の花、レンゲの花が黄色と紅のじゅうたんをしきつめるようになります、ミツバチと「ハチ飼いさん」は急にいそがしくなってきました。

いちばん早く花の咲く九州をふり出しに、ミツバチの旅行が始まります。

あたたかい国のミカン畑をとり回って、ミカンの蜜を集め、川ばたのアカシア・マロニエ、森のボダイジュというように、春から夏の花を追って、北の国、北海道までわたっていくのです。

ハギや、ソバの蜜をたんまりと集めおわるころになると、北海道にはもう、冬のつめたい風が吹

き始めるので、「ハチ飼いさん」はミツバチをつれて、内地の冬越しをする場所へ帰っていくのです。「ハチ飼いさん」とミツバチは、一年の大部分を、花を追って野や山でくらすのです。

「花を追う人々」というのは、ミツバチを飼っている「ハチ飼い」の人のことです。「ハチ飼い」の人は、一箱に二万びきから四万びきもミツバチのはいった巣箱を一〇〇箱から三〇〇箱くらい、ある時は貨車にのせ、ある時はトラックにのせて、花ざかりの畑から畑へと旅をつづけていくのです。

ある時には、ハチの蜜を求めて、千メートルもある所まで、のぼっていくこともあります。

ミツバチのはいった巣を、貨車からトラックに、それから手おし車にのせかえてはこんだり、時には、一箱ずつせおってふじづるをたよりにあぶない山道を行くこともあります。

「ハチ飼いさん」は、いつもハチといっしょにいますので、巣箱を山奥にはこんだときには、ワラビやゼンマイをおりしいてテントを張り、何日も何日もテント生活することもあります。あらしになって、テントの中で毛布をかぶってふるえているようなこともあります。

このように、花を追って蜜を集めるのは外国にはないことで、日本だけですが、これは日本の地形が南から北に細長くのびていて、南のはしから次々に花が咲いていくので、しかたがないことなのです。

今、日本には三〇〇〇人くらいの「ハチ飼い」の人がいますが、この人たちはミツバチを使って、一年に七〇〇トンから八〇〇〇トンほどの蜜を集めます。これの約五％はミツバチの冬の食料としてもどしてやりますが、日本でとれる蜜だけではたりなくて、毎年約一万二〇〇〇トンほど外

国から輸入しています。

蜜の色や香りは、花の種類や、とる季節や、その日のお天気によってちがってきます。無色・淡黄色・黄金色・暗黄色・褐色・黒褐色などがあります。

ふつうには、ミカンとレンゲとクローバーの花の蜜がいいと言われていますが、これはみんな黄色のコハク色です。ソバの蜜は、色もこく香りが強すぎて、上品でないと言われています。

ミツバチは、アメリカ種のものといタリアとソ連系統のハチを使っています。日本にもハチはたくさんいますが、日本のハチは短気で、おこりっぽくて、すぐ人をさすし、巣を作るのも早いですが、こわすのも早いので、蜜を集めるには、つこうが悪いのです。それで、「ハチ飼い」の人は、日本のハチはあまり使っていないのです。

はち蜜は、五千年ぐらい前の古代エジプト・ギリシア・ローマ時代から、神話や伝説につたえられて、不老長寿の霊薬、つまり、「長生きをする、ふしぎな力を持った薬」として、たいせつにとりあつかわれてきましたが、外国では、今でもはち蜜は栄養価の高いものとして、ふだんの食事にたくさん使われています。ホット・ケーキにかけたり、お菓子に入れたり、お湯や水でいて飲んだりして、砂糖の三倍ぐらいの量を使っています。

ロンドンでは、学校給食にはち蜜を使っているという話も聞きました。

あの甘いのはち蜜を、そんなにたくさん食べたら、虫歯だらけになるだろうと思いませんか。ところが、花の蜜の中の糖分は、ハチのおなかの中でいったん消化されて、果糖と、ぶどう糖という栄養分にかわっているのです。ですから、いくら食べても虫歯にはならないのです。そのうえ、果糖や

ぶどう糖は食べるとすぐ、栄養分として人間の体内に吸収されるので、たいへんつごうがいいのです。

また、はち蜜だけでなく、ミツバチの巣もたいへん役にたちます。ミツバチの巣は、大部分ミツロウでできていて、このミツロウは女の人のおけしょうの材料として、なくてはならないものです。たいいていのものが化学的に作ることができる世の中ですが、ミツロウはまだ、作ることができないのです。

五月に静岡県のみカン山に行ってみると、山の中は、白いぼつりした感じのみカンの花の花ざかりで、甘ずっぱい香りが、あたり一面にただよっていました。青い海には白帆が並んで、たいへんのどかながめでした。

この中でミツバチは、いそがしそうに花から花へとび回って蜜を集めていました。

「人のうちのみカン山に、ミツバチの巣箱をおいても、しかられませんか。」と「バチ飼い」の人に聞いてみました。

「前は、ミツバチをつれて来させてくださいとたのむと、みんないやがりました。『ハチに蜜を吸われたら、ミカンの甘みがなくなつて、すっぱくなるからいやだ。』とか『ハチがさして、ミカンの皮がデコボコになったら、売りものにならないからだめだ。』などと、ことわられました。近ごろでは、ハチが来たほうが、おしべの花粉が、めしべの先によくついて、実のなり方もいいということがわかつて、毎年来てくださいと、前とはあべこべに、たのまれるようになりました。」と、話していました。

ソ連あたりでは、何町歩の畑にはミツバチの巣箱をいくつおかなければならないと、法律できめてあるそうです。ミツバチが来るのと来ないのでは、実のなり方が三〇パーセントもちがうことが、はつきりしているので、増産のために、ミツバチを使っているでしょう。ソ連では花の咲く時期が一月ですが、日本では三月の菜種から始まって、十一月のソバやビワまで二〇〇種類もの蜜源（蜜のとれるものと）があり、しかも北から南に細長い地形なので、日本の「ハチ飼いさん」はいつもしそがしいのです。

ミカン山で、「ハチ飼い」の人は、時々、あちらの巣箱、こちらの巣箱をのぞいていました。私も、させないように、ベールのついた麦わら帽子をかぶってハチを見ました。「ハチ飼い」の人は、「ハチは、何日見てもあきませんよ。ハチの世界はおもしろいですからね。」と、いろいろのお話をしてくれました。

——「私の社会見学」による——

単語リスト

真っ黄色（まっきいろ）①「名・形動」黄
的
椿（つばき）①「名」山茶
蓮華（れんげ）①「名」蓮花

紅（べに）①「名」深紅色。紅色顔料
振り出し（ふり出し）①「名」出发点。开始。开端
アカシア①「名」洋槐。刺槐

マロニエ①「名」七叶树

菩提樹(ぼだいじゆ)②「名」菩提树

萩(はぎ)①②「名」胡枝子

蕎麦(そば)①「名」荞麦。荞麦面条

たんまり③「副」很多。许多

冬越し(ふゆごし)因寒冷的冬天中止外面的工

作、呆在家里等待冬天过去

花盛り(はなぎかり)③「名」鲜花盛开的季节

手押し車(ておしぐるま)「名」手推车

藤蔓(ふじづる)①「名」藤蔓

蕨(わらび)①「名」蕨菜

薇(ぜんまい)①「名」紫箕。薇

折り敷く(おりしく)③①「自五」折花、草等的枝

条

無色(むしょく)①「名」无色。白色

淡黄色(たんこうしょく)③「名」淡黄色

暗黄色(あんこうしょく)③「名」暗黄色

褐色(かつしょく)①「名」褐色

黒褐色(こつかつしょく)①「名」暗褐色

クローバー②「名」(植)三叶草

琥珀(こはく)①「名」琥珀

不老長寿(ふろうちようじゆ)④「名」长生不老

靈薬(れいやく)①「名」灵药

栄養価(えいようか)③「名」营养价值

給食(ききうしょく)①「名」自サ「学校、工厂等」

供給饮食。包伙

果糖(かとう)①「名」果糖

蜜蠟(みつろう)①「名」蜜蜡

ぼつてり③「副」自サ「肥厚、敦实」

甘酸っぱい(あまずっぱい)⑤「形」酸甜

白帆(しらほ)①「名」白帆

凸凹(でこぼこ)①「名」形动・自サ「坑坑洼洼。凹

凸不平

売り物(うりもの)①「名」出售的物品、商品

雄蕊(おしべ)①「名」雌蕊

花粉(かふん)①「名」花粉

雌蕊(めしべ)①「名」雌蕊

町歩(ちようぶ)「接尾」計算田地、山林面积的單位「町」的別稱町歩。一町步約

九九・二公亩、九九一七平方米。

枇把(びわ)①「名」枇把

ベール①「名」面紗。面罩。掩盖物

麦藁帽子(むぎわらぼうし)①「名」麦秆帽。麦秸

帽

解説

1. 菜の花畑：菜は油を取る植物。菜の花が黄色に咲いている畑。
2. ブンブンブン：蜂の羽の音。
3. 早春：春のはじめ。歴の上では春になったが、まだ薄ら寒さの感じられる時分。
4. レンゲ：ハスの花。
5. 紅：赤い色。くれない。紫がかった濃い赤。
6. じゆうたん：カーペット。床の敷物として使われる、厚い毛織物。
7. 敷きつめるも：端から端までいっぱいに広げて敷く。
8. ハチ飼いさん：ミツバチを飼ってハチミツを集める職業の人。
9. ……をふり出しに：……を出発点として。

10. 春から夏の花を追って：春から夏にかけて咲く花を追って。

11. たんまりと：たくさん。（金額・時間などが）十分にあって、満足出来ることを表わす。

12. 内地：外国の土地を外地と言い、それに対して本国を内地と言うが、ここでは、北海道に対して本州の意味。

13. 冬越し：寒い冬の間、外の仕事をやめて家の中で冬の終わるのを待っていること。

14. 巣箱：ミツバチが巣を作っている箱。この中にハチを入れて飼う。

15. 貨車：荷物や動物などを運ぶ汽車。

16. 花盛り：花がいちばん多く咲いている時。

17. 藤蔓を頼りに：藤蔓に助けられて。藤蔓につかまって。

18. 山奥：山の中の木がたくさん生えていて、下からは見えない所。

19. 折り敷く：草や木の枝などを折って下に敷く。

20. テントを張る：雨や日光などをさえぎるために、カンバスなどの幕を広げてロープで引っ張り、中に入れるように作る。

21. 毛布：厚い地の毛織物で、寝具などに使う。

22. 褐色：茶色。

23. 黒褐色：黒色のはいつている茶色。こげちやいろ。

24. 短気：気みじかなこと。出来あがりや終りが待てず、すぐ催促したり怒ったりすること。

25. 怒りっぽい：すぐ怒る性質。

26. 都合：何かをする時、影響を与えるような事情。

27. 都合が悪い：ここでは、蜜を集めるには適しない、具合が悪いという意。

28. 不老長寿：長生きすること。

29. 靈藥：不思議によく効く藥。

30. といて：溶いて。溶かして。

31. 学校給食：学校で、全部の生徒に同じ食べ物で食事を与えること。

32. 静岡県：日本のだいたい中央部の太平洋側にある県の名。暖かく、みかん、お茶の産地として

有名。

33. ぼってりした：柔らかく膨らんで重そうなようす。

34. 白帆：船の白い帆。



1. りんごの涙

俵万智

青森県でりんごを栽培しているという女性と、ある会合で一緒した。その日は東京にお泊りになるとのこと。宿がたまたま私の住んでいる町と同じ方向だったので、帰りも一緒に地下鉄に

乗った。

自分のことを「りんご園のおかみ」とその人は言う。小柄で、どこか少女を思わせる二重まぶたの目。おっとりとした話し方なので、その「りんご園のおかみ」という言葉も、なにか素敵な絵本の言葉のように、ロマンチックに響いた。

今年は天候が不順で心配だというような話をしながら、ふとその人は何かを思いついたらしく、「そうだ、あなたに質問してみよう」

「えっ、何ですか」

「りんごの花で布を染めると、どんな色になると思います？」

本物のりんごの花を、私は見たことがない。写真か何かで、たしか白っぽい花だったように記憶している。まるで根拠はないが、なんとなく淡いピンクかなという気がして、そう答えた。

「うふふ、正解はこれ」

ハンドバッグの中から取り出された一枚の木綿のハンカチ。広げると、うすい黄色にうすいきみどり色を混せてやわらかくしたような色だった。幼いころ、風邪をひくと必ず母が食べさせてくれた、すりおろしたりんごの色にも似ている。そんな記憶もあいまって、私はしばらく、うつとりとそのハンカチに見入ってしまった。りんごの浴びた陽ざしがハンカチにも吸収されて、それが内側からやさしく光っているような感じである。

「きれいですねえ」

やや間の抜けたタイミングで私がそう言うと、その人は嬉しそうにはほえんで、またきちんとた